

< 会員の広場 >



坐の日本文化 大東流合氣柔術と明暗尺八

大東流合氣柔術 無傳塾 湯淺 拓幸

大地にどっしりと根を下ろし、枝葉を広げ、花を咲かせ、実を着ける。そうして初めて、小さな芽は生長して亭々たる大木となり、遂には聳立する巨樹巨木となる。その姿こそが、自然に従い、自然に逆らわず、自らを実現して行く、真実の日本文化の象徴に他ならぬ。

座ることは動かぬことである。その究極は自らを無にすることである。ただ静かに息を吐き息を吸う。そこにこそ、人間の根源的な姿が現れる。何の為に生まれ何の為に生きて行くのかという問は、その呼吸の中で次第に消えて行く。意識は消えるが、体は自然のままに生きている。まず息を吐き次に息を吸い、そしてまた息を吐き……などと考えて呼吸する者が一体どこにいるか。心臓を自分の意志で動かしている者がこの世界に一人でもいるだろうか。

座ることは、地球と一体化することである。重力の方向と同一化することである。この時、人間の体は最も安定する。そうして、その安定が最終的には心の安定へと変化する。深化する。

無傳塾の理想は、恐らくここにある。自らはただ姿勢を正し、呼吸を整え、真っ直ぐに立つだけ。座るだけ。開手することによって攻撃してきた相手の力を取り、相手を持ち上げ（と言うより相手が勝手に持ち上がるのであるが）、後は無力になった相手を下ろすだけ。何の造作もない。殆ど技とも言えぬ「技」である。然し、恐るべき破壊力を秘めた「技」である。

それは、私が偶々修行していた明暗尺八と共通する。修行に際し、師匠から折に触れ「吹け吹くな」「鳴らせ鳴らすな」と教え諭された。ただ黙って座り、肩の力を抜いて、静かに竹（私達は普段尺八を無造作にそう呼んでいた）に息を吹き込み、「音が出て来るのを待つ」。そうして、自分の竹の音に耳を澄ます。その繰り返しである。うまく曲を吹こうなどと考えるはいけない。況してや、人に聞かせようとかうまく思われようなどとは以ての外であるとも言われた。

あれから二十五年。今では、心を静めて座り、ただ竹に息を吹き込むだけでいい、そう思うようになって来た。曲を吹くのではない。竹を鳴らすのでもない。息を吸って、竹に向かって吐くだけ。「只管打坐」ならぬ「只管打吹」である。人間は、二足歩行すること

によって大脳が発達し、両手の自由を獲得し、道具を創り出し、更なる知的、肉体的進化、発展を遂げたとされる。そうして、偉大な文化、文明を築き上げ、今日の繁栄を獲得して来たと言われる。言わば、「立つことこそが進歩発展であり、動き続け、進み続けることにこそ価値がある」とする前向きの発想である。西洋的な人間観である。それは決して間違っているのではない。然し、現代文明は様々な面で壁に直面しつつある。

一方、ここにそれとは趣を異にする一つの考え方、伝統的、東洋的な人間観がある。古くは老子や荘子が唱え、現代に於いても、例えば禅の哲学の中に脈々と受け継がれている考え方である。「何も為さぬこと」「動かぬこと、進まぬこと」をよしとする「無為自然の哲学」であり「無の哲学」である。「人間存在そのものに価値がある」と考え、「ただ黙ってそこに座り、瞑想し、最終的には考えること、感覚することをやめる」、そういう考え方である。「人間とは究極的には息を吸い息を吐く存在であり、全ての基礎はそこにある」そういう発想である。言わば、「坐の哲学」である。

大東流合気柔術も明暗尺八も、恐らく究極の姿は「坐」であろう。

大東流合気柔術の諸々の技は究極的にはただ一つの「技」に帰着する。「合気」という名の「技」へ。合気を会得した者は、ただ黙ってそこに座り静かに呼吸しているだけ。然し、相手が触れれば動けなくなる、飛んで行く。或いは、触れる前に戦意喪失して戦いをやめる。恐らく、真の名人・達人とはそういうものであろう。「戦わずして勝つ」、更に進んで、「勝ち負けの埒（らち）外に出て行く」、そこにこそ、武道の本質があるのではなかろうか。

「明暗尺八には曲はない」とも言われる。それでは、一般に「明暗尺八本曲」と呼ばれるあの三十四曲は一体何なのか。それは、竹林を吹き抜けて行く風の音であり、松風である。目指すところはただ一つの「真音」であり、その音が鳴った時に得られる解脱の境地である。「一音成佛」と言われる所以である。ただ黙って座り、静かに息を吐き、一音が鳴るのを待つのである。そうして、その一音もやがては「虚空」へと消えて行く。「無」に帰って行く。

「坐」とは「大地（土）の上に二人の人が立つ」姿の象形である。然し、その意味するところは、「座る」ことである。この矛盾は巨木の姿に通じる。木は立っているのではなく、寧ろ座っているのではないのか。彼等は動けぬのであるから。動きの基本は立つことであり、動かぬことの基本は座ることなのであるから。「坐」によって、地球の重力、磁力と一体になる時、日常の「小我」は消え、我々の意識は、限りなく「無」に近づいて行く。

聳え立つ巨木の如く、ただ座して待つ。その時、無言の気合が合気となり、戦いの場は消え、敵も味方もない「彼我一如」にして「絶対不二」の境地に至るのではなかろうか。人間修行としての大東流合気柔術の世界にあって、開手と閉足によってその精髓を伝える無傳塾の技こそ、「坐の日本文化」の正統であり、「坐の哲学」の端的な現れに他ならぬ。

無傳塾入塾以来早くも十年。ようやく奥義三段の許可を受けるに当たり、少しでもその精髓に近づきたいものと只管に願い、文字通り「息長く」修行を続けたいと念じる今日この頃である。

湯浅 拓幸 (ゆあさ たくゆき)

1953 年、北海道生まれ。北海道教育大学札幌校卒業。1976 年から 2013 年まで、道内各地の道立高校で国語教師として 37 年間教鞭を執る。定年退職後、札幌市立高校と道立高校で時間講師を勤める。資格・免許: 高校国語専修免許、大東流合気護身術無傳塾奥義三段、少林寺拳法三段、明暗尺八免許皆伝、英検 2 級、趣味: 尺八、読書、クラシック音楽鑑賞、オートバイツーリング。現在、大東流合気護身術無傳塾所属。